

知恩院の遠国末寺支配について

——特に関東・信濃を中心に——

藤 本 顕 通

(一) は じ め に

知恩院が総本山の地位を確立し得た要因は、宗祖廟の在所として祖師信仰の象徴で在り続けたこと、また、室町中期以降の白旗派系僧の入院で、それまでの青蓮院の外護もあって、他本山を抑えて香衣執奏権を独占し得た点にある。さらに京畿を中心とする門末圏は、中井真孝氏が「中世後期・近世初頭の知恩院と京都門中」^①、「浄土宗の本末関係」^②の論稿の中で指摘されているように、京都門中の中でも有力寺院十九ヶ寺を中心に形成され、加えて近江浄厳院を中心に形成された浄厳院門末をその支配下に置いたことで、その基盤をさらに拡大したわけである。知恩寺との本末争いを経て香衣執奏権を独占するに至ると、その権能を行使することで地方本寺々院との間に本末関係を結び、その支配圏を拡張した。しかし知恩院門末の中心は、京都・大坂・大和・近江の直末寺院であり、特に京都・大坂の直末寺院であった。御忌会に際し、唱導師を務められるのは京都・大坂門中の直末住職のみに、近代に至るまで限られていたことからその事が推察できる。京畿門中が知恩院門末において中心的存在で在り得たのは、主として知恩院との地理的位置関係にある。では遠隔地の末寺、つまり遠国末寺々院は知恩院にとってどのような存在であったのか。

知恩院は江戸初期に幕府の外護の下、完全に浄土一宗総本山の地位を確固たるものとし、一層地方寺院をその傘下に組み入れるが、増上寺が総録所として整備されると、知恩院が持つ可き宗内行政の権能の多くが増上寺に移管され、知恩院は名目的総本山の地位に置かれるようになった。だが、このような状況下にあっても知恩院はその末寺支配の権能を持ち得た。しかし、増上寺が宗内行政を執る中であって、知恩院の末寺支配に対する既得権は完全に保たれたのであろうか。知恩院の遠国末寺に対する支配を追いつつ、本稿ではその点について若干の考察を試みたい。特に増上寺の膝下である関東及びその隣接地域を中心に見てみたい。

(二) 関東について

貞享二年（一六八五）、幕府の神社奉行より出された「田舎檀林江新附之寺院覚」^⑤に

貞享二丑年仰出之内、田舎檀林拾三ヶ寺近辺有之知恩院・増上寺両末寺之分、其檀所之或末寺・或支配ニ相附可申、但無抛由緒之寺院、断有之者披遂穿鑿、於無其謂者、急度可被申附由有之付、此度檀林江支配寺并末寺附属之次第、寺社奉行所江從増上寺依相談、其檀所之五里余六里之内ニ有之右両寺之末寺、向後檀林江末寺、又者支配ニ可被相附候、但拾石以上之御朱印寺之分者、其檀林之支配寺ニ被相定、自分之弟子者不及申、又末之弟子迄、其檀林へ令入寺、可被為致修学、勿論為支配寺上者、对能化不可有無礼候、且亦支配之寺院、或隠居、或無住之節、後住之義直弟於為其檀林之所化者、増上寺江從檀林相達之、吟味之上、年数於相應者、如先規可被許容、拾石以下之御朱印寺、其外之小寺者、各檀林末寺ニ可被附之、然上者一向任其檀林之差図、本末之規式、急度可相守者也、

（中略）

右之趣不可有違背、大光院・常福寺・大嚴寺三檀林者、其近辺ニ知恩院・増上寺両末之寺院無之ニ付、此度無新

附者也、

貞享四卯年正月日

寺社奉行所

とあって、大光院・常福寺・大蔵寺三檀林を除く田舎檀林十ヶ寺へ、その近辺五・六里以内に存在する知恩院・増上寺兩末寺を支配寺・新附末寺に組み込むことが明記されている。この寺社奉行よりの指示は、従来の本末関係を崩し、旧本寺の末寺に対する既得権を全く無視するものであり、幕府の宗教行政によって新たな本末関係が構築されて行ったと見るべきであろう。幕府は、その命令伝達を速かに計るために本末改を行い、本末制度を整備して行く。しかし、従来の本末関係が一定の地域に限定しない広範な地域に及ぶものであり、その上においては幕府の意図する命令伝達の組織として、本末制度は不充分であった。これを補うために一定の地域に限定する同宗派寺院の統制支配組織である触頭制度が整備されて行く。貞享二年の幕府寺社奉行よりの指示で取った措置は、本末制度と触頭制度の相互補完の上に取られたものであろう。

宇高良哲氏は触頭制度上から、知恩院の支配圏は尾張・美濃・飛騨・越後を境界とする西国と、増上寺との兩触支配地の信濃と指摘されている。^④前述したように、増上寺支配圏内の檀林寺院近辺の知恩院直末寺院はその末寺に組み込まれたが、そうした状況下で新たに直末を望む寺院があった。こうした寺院の直末への編入過程とその支配形態を見てみよう。

下総国葛飾郡小福田無量寿寺（茨城県猿島郡五霞村）は、『^{五国}蓮宗精舎旧詞』（以下『旧詞』と略す）によると、「開山藤田持阿上人寂日五月五日」とあるのみで、寺名も無量寺と誤記された上、その本寺・支配寺についての記載はない。増上寺が全国寺院の由緒調査を行なった元禄八年（一六九五）から同十一年（一六九八）の時点では無本寺々院であったが、宝永三年（一七〇六）十二月に檀林結城弘経寺末へ編入されている。^⑤『知恩院日鑑』（以下『日鑑』と略す）元禄十七年三月三日条に

下総國小福田村無量寺靈波入院御礼出候、当山為御直末証文差出候、浅草心行寺も書狀添来候、円蒼上人御名号も当山末寺と有之候、此度も御名号も願候得共、重而惣旦那中連判証文被差出候へ、可致披露候旨申渡候、とあつて、知恩院直末であることを訴えているが、元禄の本末改の際に無本寺々院である以上、無量寿寺の主張は認めがたい。さらに『日鑑』正徳二年九月三日条に

下総国関宿土塔無量寿寺の書狀到来、兼々九勝院迄申入候通、只今迄結城弘經寺末ニ而御座候處、増上寺願譽大僧正へ御願申上、本山直末ニ罷成候由、書狀被差越候、返答ニ、先達而七月晦日ニ増上寺役者中の其段申来り候ニ付、遂披露、着帳相済候段、及返答候、

とあり、無量寿寺から増上寺を通じて、知恩院直末への編入を改めて願ひ出ている。また、無量寿寺は当時の知恩院役者九勝院海円を通じて、知恩院へ働きかけていたことは、海円より無量寿寺に出された同年九月三日付の書狀の中に、「従先年段々被仰聞候本寺替之狀、今般増上寺ニ而事済、」とあること⑤でわかる。さらに智積院所化衆を通じても働きかけていたようである。増上寺役者中から知恩院に出された書狀の内容は、『日鑑』同年八月十一日条に、④

一 増上寺役者中の書狀来、此度下総国土塔村無量寿寺入来、結城弘經寺末寺有之候故、記主上人開基之寺、其上当方丈由緒有之付、此度御賞、本山之御直末ニ御附候、依之金百疋差上候、

と、結城弘經寺末から、良忠の開基と祐天の縁の由緒をもって、弘經寺から祐天が貰い受け、知恩院末へ加えたい旨を伝えて来たものである。この書狀にあげられた無量寿寺の由緒によつて、九月三日に知恩院の裁許が下り、知恩院直末に加えられた。しかし、増上寺が無量寿寺に発給した「本寺証文」には八月朔日の日付があり、知恩院の裁許を待たずして増上寺の手續が処理されている。これは本寺知恩院の意志決定よりも増上寺側の決定が優先していたことを示すもので、本寺改の異例な措置としか言いようない。

増上寺より無量寿寺に出された「本寺証文」①をここに挙げると、

其寺事、先年結城弘經寺末寺ニ而有之候処、藤田派之由緒有之ニ付、此度知恩院末寺ニ被成下候、然共、支配之儀者、只今之通、結城弘經寺之支配請之、住持替之節者、結城所化之内綸旨頂載以後之僧可願之、尤弟子共結城江可令人寺候、毎歳年礼一度宛直参仕、無怠慢可相勤之候、右之趣得候、其意、末寺檀方江も、兼而申聞置、向後、無違様可被致候、以上、

増上寺三十六世顯誉代役者

安養院印

良源院印

檀 歷印

靈 旭印

正徳二壬辰歳

八月朔日

というものである。知恩院直末に本寺替がなされても、支配については依然、結城弘經寺の支配を受けることを通告されている。また、結城弘經寺よりは数ヶ条の定書^⑤が示されている。

定

- 一 増上寺顯誉大僧正依御願、此度本山末寺ニ相改候事、
 - 一 自今已後支配之儀、不可致違背事、
 - 一 末寺役之儀、雖指免候、登山之節者能化対面之儀式、不相乱事、但年礼之儀者毎年直参可仕候、
 - 一 其寺弟子共前々之通、当山所化ニ可差出事、
 - 一 其寺住持替之節者、従当山綸旨頂載已後之僧、吟味之上ニ而可申付事、
- 右之条々永代之住持不可違札者也、

結城弘經寺二十三世

正徳二壬辰年七月日

遣 菅花押

印

関宿領土塔

無量寿寺

前掲の増上寺よりの「本寺証文」に示された内容と同様で、先に触れた「田舎檀林江新附之寺院覚」の田舎檀林被支配寺へ下知した法度内容を踏襲したものである。

幕府寺社奉行より出された「田舎檀林江新附之寺院覚」は、檀林を触頭とし、その近辺五・六里を一定の触下地域として、その域内に存在する全ての寺院を触下寺院に編入させようと意図したものである。本来、無本寺々院であった無量寿寺が、宝永三年に結城弘経寺末へ組み込まれたのも、それによるものであろう。こうした幕府の宗教行政が、教団内の本末関係よりも優先する過程においては、知恩院直末への昇格も支配構造を変革させるものではなかった。本末関係にあって本寺住職の任免権は本寺の権能に属するが、檀林支配の直末にあっては本寺知恩院の住職任命権はない。知恩院支配圏にあっては、直末が孫末寺院の住職を推挙するのは慣例化していたが、任免権はあくまでも本寺知恩院の権能である。本寺知恩院が檀林支配の直末寺に有し得た権能は、三年に一度の報謝金の徴収、つまり山費徴収権のみであり、従来の本末間に存在する本寺既得権がかなり制約されている。これは知恩院の本寺としての地位が形式化されたことを意味している。無量寿寺が知恩院直末に加附される際に、増上寺の意志決定が優先したことがそれを物語っている。檀林寺院の支配を受ける知恩院末寺は、実質的な触頭寺院よりの触支配と、知恩院との形式的な本末関係における支配の二重支配を受ける特異な存在であったわけである。

幕府主導の下に本末制度・触頭制度が整備される過程で寺院間の支配構造は固定化して行くが、無量寿寺のように個々に本末改が行われた例もある。しかし、前述したように現況の支配構造内に成されたもので、それに支障を来た

すものではない。また、増上寺支配圏において、無朱印寺院が知恩院直末に加附されることは稀なことである。無量寿寺が知恩院末に加附されたのは、「記主上人開基、其上、増上寺御上寺御丈室御由緒有之由ニ而、御貫、本山直末ニ被差加度旨」ということによる。特に、増上寺祐天の願と助力が働いていた。祐天は無量寿寺以外にも、神奈川慶運寺末良忠寺・檀林飯沼弘経寺末本願寺・同末高声寺と正徳二年にいづれも知恩院末に加附させている。良忠寺・本願寺は三祖良忠の遺跡寺院、無量寿寺・高声寺は藤田派由緒寺院であるが、いづれも無朱印寺院である。祐天は積極的に宗内由緒寺院復興を推進したが、右記の寺院の知恩院直末への編入はその一貫に行われたもので、固定化した本末関係内でのこれら由緒寺院の寺格を高めようとする意図が働いていたことが窺える。「田舎檀林江新附之寺院覚」には、御朱印十石を基準として知恩院・増上寺両末寺院を被支配寺・末寺に区分している。これは、一つの寺格設定であり、朱印十石以下の両末寺院は元禄本末改に際して、その由緒書に両末寺院であることが表記できなかったのにもかかわらず、無朱印寺である寺院が支配と言う格式に置かれた措置は異例であり、増上寺支配圏にあってこの様な措置が取られたのは、この四ヶ寺以外には数例あるのみである。無量寿寺は、元禄十七年前後より知恩院役者中、智積院所化衆を通じて、知恩院直末への加附を願ひ出していたが、その背景には旧藤田派系寺院間での本寺格争い、つまり旧藤田派々名再興に伴う同派の名目的本寺格を高声寺と争っていた点に求められよう。そこに祐天の由緒寺院復興の動きがあり、知恩院直末に加附され、檀林支配寺の寺格を得たわけである。

(三) 伊豆・信濃について

従来の本末制度を補完する上で触頭制度が整備され、知恩院・増上寺の両支配圏が形成されて行くが、その両寺支配圏が形成される過程には本寺以外の支配に対して異論を唱える末寺もあった。『日鑑』宝永五年十月九日条に、

一 伊豆三嶋長円寺登山、此度増上寺へ、寺院住持替之節訴出後住之儀、増上寺へ遣可申旨、書付にて由来、何

も難儀仕候、前々通、以御威光仕度由申之、五ヶ寺の書状来、

とあって、知恩院直末の伊豆三島長円寺を含む五ヶ寺が、住持替之節に増上寺が後任の吟味に当ることに対して困惑していることを訴え、従来通り本寺知恩院よりの沙汰を受けたいと表望している。この訴えに対し、知恩院は十月十四日付の返書に^⑥

芳墨令披閱候、然者、当八月中、從増上寺被申触候儀ニ付、御門中迷惑被存、旧来之通被差置候様ニ度旨ニ付、御門中為惣代長円寺登山、再三願出被申、御門中并旦那判形之一帯等迄遂披見候、併此義者、当夏大僧正御在府之中、増上寺役者中粗被申聞候、不限伊豆国、諸国本山并増上寺末山之寺院、恣致住職候故、或公儀御搆之僧、又ハ追放追院、并異流之僧侶有之候間、両山之末寺方、急度可致吟味之旨、遂相談候、右之通候間、従来之通、狼住職候義、許容不罷成候、則長円寺江其段委細申含候間、可為演述候、恐々謹言、

十月十四日

林光寺

誓願寺

願成寺

蓮馨寺

と、知恩院・増上寺両末寺の住持の不行跡を取締る為に、住持替之節、後任を厳しく吟味することを増上寺側と協議し、その上に取った措置であったことを伝えている。この知恩院と増上寺の協議は、住持替之節の住職任免権をそれぞれの支配圏を固定した上で行使しようとしたものである。この協議によって伊豆国は増上寺の支配圏に編入されたのである。同時に伊豆国の知恩院末寺も増上寺の支配下に置かれるに至った。知恩院は伊豆の直末寺に対する既得権を放棄したのである。長円寺の再々の訴えに対して、知恩院は伊豆が京都の遠隔地で事務処理上不便であることを説

いているが、末寺にとっては従来の本末関係を崩す措置に納得できなかったのである。また、知恩院と増上寺の支配圏もこれを機に固定化したものと思われる。

知恩院が増上寺支配圏内の末寺に対する既得権を放棄する一方で、自支配圏の末寺に対しては執拗にその権能を示している。信濃国は増上寺との両触支配域とする特異な地域で、国内の触頭寺院も他地域と異なり、同じ寺院が知恩院分の触頭と増上寺分の触頭を兼務している状態であった^⑥。当然、知恩院と増上寺との間には、末寺支配の上で問題が起こっている。

宝永二年（一七〇五）三月廿八日付の松城大英寺へ出した知恩院役者書状に^⑦

去二月之芳札、今月朔日来着、令披見候、旧冬從増上寺其許へ、寺領・本堂間數・庫裏間數・寺内坪數・末寺・寮舎、本寺付、随分致吟味差出候様ニと申事候付、貴寺触下之寺院吟味之上、書付被差出候中、肴町西念寺義・古跡ニて、本山御末寺ニ申伝候ニ付、前々御末寺ト被書上候処、先年御朱印頂戴之節、増上寺末寺ト、長明寺義ニ付、申来候由、就夫、此度増上寺末寺ト書付被差出之段、書面之趣得其意候、前々西念寺・長明寺二ヶ寺共ニ、当山末寺為無紛、其寺々之住持并旦那印形を相加、猶又各々も奥書被致、加印形、被差上候証文帳、当山御藏ニ納有之候間、此度写差遣候、然所長明寺ハ由緒改之節、増上寺末寺ト書出、西念寺ハ此度増上寺末寺ト書出シ候義、言語道斷、御条目違背之義候、依之前々之御条目共、別紙ニ写差遣候、乍去、西念寺之義、前々之帳面ニハ埴科郡松城西念寺ト有之候、此度之書面ニハ肴町西念寺ト被仰越候、松城西念寺ト肴町西念寺ハ同寺ニて候哉、別寺ニて候哉、若同寺ニ而候ハハ不屈之至、可為越度候、

一 此度之書面ニ、貴寺触下之当山末寺之諸寺院、増上寺末寺支配之様ニ而、何も迷惑被存候段、是又得其意候、前々從公儀被仰出候御条目、從当山之条目、分明之上ハ、旧来無紛本寺を差置、今更余寺末寺支配ニハ罷成間鋪候、右御条目之写被致拝覧、可被得其意候、右之趣被遂吟味、重而一左右可有之候、恐々謹言、

三月廿八日

松城

三 役印
六 役印

大英寺

とあって、大英寺触下寺院の長明寺・西念寺が、増上寺の実施した寺院改に増上寺末寺と記帳したことに、本寺知恩院が抗議している。この書状には触られていないが、同門中の松源寺も増上寺末と記帳していたようで、同様の抗議がなされている。『日鑑』宝永二年九月十八日条に^⑧

一 信州松城西念寺被参、被申候へ、長明寺・松源寺江戸へ罷下、増上寺へ願申候処、従本山御添状申請候者、可被相済候由にて、追付両寺も登り候間、私義も滞留相待候由、断被申達候、

とあり、知恩院よりの抗議に対処すべく、増上寺へ提出した由緒書の誤記訂正の為に長明寺・松源寺が江戸へ下り、その報告に西念寺が知恩院へ出向いている。これに至る間、三ヶ寺は再三増上寺に対して、誤記の訂正を願ひ出ている。増上寺は三ヶ寺の申立について、知恩院よりの本寺証文及び六役連判の添状提出を要求、それによって知恩院直末への編入手続きする旨を伝えている。^⑨ 知恩院側は西念寺の報告を受け、同月廿五日に六役詮議をなし、翌々日三ヶ寺に万治三年・同四年の本末改、元禄二年の鉄炮改の際に三ヶ寺より提出された由緒書写を本寺証文・六役連判添状に添え与え、^⑩ 増上寺への提出を指示している。さらに増上寺の手続きが済んだ後、再度知恩院へ直末願と大英寺の添状を持参することも下命している。翌年三月、三ヶ寺が触頭大英寺よりの添状を持って上京、直末願を提出し、この一件は落着した。

この一件の発端は、三ヶ寺が知恩院末寺であるにもかかわらず、増上寺末寺として由緒書に記帳したことであるが、元禄五年八月十一日付の大英寺宛知恩院役者書状^⑪の中に、

一 其地松城寺尾村長命寺事、^(明) 本山直末紛無之処、当住従増上寺住職被致、増上寺末寺罷成候様被存候段、中々

左様之義ニ而も無之候、縦住持何方々致住職候共、本山直末ニハ紛無之候、若当住不心得ニ而、他之末寺之様被存候者、右之趣急度御申渡可有之候、為其如此候事、

と認められている。これによれば、長明寺住職が増上寺より任命され入寺した為、増上寺末寺となったように思っていることを、大英寺より戒める様に説いている。増上寺の本末改めを機に、長明寺が本寺替を意図して由緒書に増上寺末と記したとも考えられる。知恩院直末寺院の住職任命権を増上寺は信濃においても行使していたことが窺える。

元禄の本末改めは、本末制度の強化を計る意味あいが濃厚であるが、同時に触頭制度の拡充発展の側面も持っている。一国単位・檀林単位と触下の一定範囲で由緒書が提出されている点にそれを認めることができる。この一件は、触頭制度の発展する過程で、増上寺の支配権が江戸と近距離にある信濃国に拡充して行く様子を物語っている。宝永二年三月廿八日付の大英寺宛知恩院役者書状に、「貴寺触下之当山末寺之諸寺院、増上寺末寺支配之様ニ而、何も迷惑被存候段、」と知恩院は末寺が増上寺よりの触・達示を受けることでその末寺化して行くことを警戒していた。大英寺よりの由緒書提出の報告を受け、即時三ヶ寺の誤記に対して抗議したのも、増上寺の支配権が拡大し、従来よりの知恩院の既得権が損われることを阻止しようとした現われである。

元禄十四年（一七〇一）に信濃国岩村田西念寺とその支配寺生往院との間に本末出入の係争が起こった。同年二月十日付の松代藩寺社奉行飯塚孫次郎宛知恩院役者書状に、

乍御報示預、致披見候、信州岩村田西念寺ト御支配所高野町生往院本末之出入、双方遂穿儀候処、先年此方へ出置候着帳之判形、謀正之論有之ニ付而、双方へ類判差出候得と申付候処、至尔今類判差出不申候、依之生往院義何之末寺とも難決候、本末之誤相究り候迄ハ、本寺付無之候得共、証文御請取可被下之旨、先書ニ申進候、然共公儀向書上、本寺付無之候而ハ、差聞申之旨、御紙面之趣御尤義御座候、然共生往院儀古跡歴然、浄土宗門紛無御座寺御座候間、向後も本寺書無之候共、証文等御請取被下候ハ、可忝存候、若慥成本末之誤相知候ハ、重

而自是可申進候、為其如斯御座候、恐惶謹言、

二月十日

三 人

六大雲院航普

式春長寺風普

三勝岩寺透普
(嚴院)

五淨円寺称普

四西園寺隨普

一淨運院單普

飯塚孫次郎様

とあって、生往院は西念寺の末寺でもなく、無本寺の寺であると知恩院六役の詮議で決した。無本寺々院となった生往院は、知恩院の触下に置れるが、宝永二年十月増上寺へ末寺願を提出し、その末寺となった。この生往院の増上寺末の編入は、増上寺の本末改に際して取られた措置であろうが、知恩院はこの措置には全く異議を唱えていない。信濃の国内において、自門末でない無本寺々院に増上寺の支配権が強く及んだ現われではないだろうか。

四 おわりに

幕府の仏教統制は、本山―本寺―末寺への命令伝達組織として本末制度を整備強化して行く。中世以来に構築されて来た本末関係の上に制度化された本末制度は、一定の地域に止らない広範な地域に及ぶものであった。それは、幕府の命令伝達をさらに迅速化するには不十分な存在であり、一定の地域を統轄する組織を必要とし、触頭制度が整備されて行く。本末制度で寺院相互間に上下関係が設定・強化された上に、新たな統制強化の触頭制度の整備は複雑な支配形態を生み出す。

貞享二年の「田舎檀林江新附之寺院覚」に示された知恩院・増上寺両末の田舎檀林末への編入は、檀林を触頭とする一定地域の本末圏の形成であり、すなわち檀林本末圏の拡充である。同時に旧本寺の末寺に対する既得権は制約乃至は失う結果となった。元禄の本末改は、無本寺々院を一層整理するものであり、無本寺々院であっても近在の触頭寺院の触下寺院へ組み込まれて行く。無量寿寺は元禄の本末改に際し無本寺々院であったが、時を置かず結城弘経寺へ編入されるのも、信濃生往院と同様に近在触頭の触下支配に置かれた現われである。しかし、無量寿寺の場合は生往院と異なり、単に触下寺院ではなく、触頭末寺である。一旦結んだ本末関係にあって、他本寺への本寺替は本寺の既得権を損なう為に本寺はそれを強固に阻止する。当然、幕府・諸藩もその行政上、固定化した寺院相互間の上下関係に影響ないしは解体を招くような本寺替は認め得ない。無量寿寺をはじめとする四ヶ寺に取られた措置は、こうした状況下にあつては異例である。この措置の背景に祐天の由緒寺院を復興しようとする動きがあり、それが異例の措置を取らせたと言える。貞享二年の寺社奉行の指示は、結果的には関東に点在する知恩院末寺を増上寺及び檀林の支配に編入するものであり、関東における知恩院の末寺に対する支配権を奪うものであった。元禄の本末改時期には、知恩院はその関東諸末寺に対する権能を全く行使し得なかった。伊豆・信濃への知恩院の支配権も、元禄より宝永年間に、一方は増上寺へ移行し、一方は増上寺の支配権が及ぶに至って損なわれて行く。さらに信濃国においては、徐々に増上寺の支配権が強化・浸透して行く。松代長明寺等の由緒書誤記の一件は増上寺・知恩院の確執の中に起こった事件であったと言えよう。寛政年間に至る頃には、信濃の支配権も増上寺へ移行した。関東・およびその周辺地域の末寺支配が増上寺へ移管する最大の要因は地理的に知恩院の遠隔地に位置したことである。

註

- ① 『仏教文化研究』一九号。
- ② 『近世仏教』四一四。
- ③ 『増上寺史料集』第一卷二二六頁。

- ④ 宇高良哲「浄土宗の触頭制度について」(『法然浄土教の総合的研究』)。

- ⑤ 知恩院所蔵『五國精舎旧詞』。
- ⑥ 『檀林結城弘経寺志』。

- ⑦ 『知恩院史料集』第三卷七一頁。
- ⑧ 『同右』第四卷一六七頁。
- ⑨ 『無量寿寺文書』九勝院海円書狀。
- ⑩ 『知恩院史料集』第四卷一六三頁。
- ⑪ 『無量寿寺文書』増上寺役者書狀（無量寿寺では本寺証文としてゐる）。
- ⑫ 『同右』結城弘經寺遺言定書。
- ⑬ 『知恩院史料集』第四卷一三四頁。
- ⑭ 『同右』第四卷一八〇頁、拙稿「江戸期藤田派系寺院の処遇Ⅱ」（『仏教論叢』第二十九号）。
- ⑮ 『同右』第四卷八〇頁。
- ⑯ 『同右』第四卷二八七頁。
- ⑰ 注④に同。
- ⑱ 『同右』第三卷四五〇頁。
- ⑲ 『同右』第三卷二六〇頁。
- ⑳ 『日鑑』宝永二年九月廿二日条（『知恩院史料集』第三卷二六一頁）。
- ㉑ 『同右』同年同月廿五日条（『知恩院史料集』第三卷二六二頁）。
- ㉒ 『同右』宝永二年九月廿二日条（『知恩院史料集』第三卷二六一頁）。
- ㉓ 『知恩院史料集』第一卷三五〇頁。
- ㉔ 『同右』第二卷四五一頁。